

日本ボランティア学習学会 in にいがた 第1分科会 報告

第1分科会のテーマは、「地域・行政・学校の連携～地域で育み、地域に活かす～『そらいろ子ども食堂』の取り組みから」です。そらいろ子ども食堂は、学生が主体となって運営している子ども食堂であり、子どもたちに温かい食事と団欒を提供し、地域を巻き込んだ居場所づくりと学習支援をしている取り組みです。コミュニティ課題解決のための多様な人々との参画、そして持続可能な活動の展開について議論しました。

そらいろ子ども食堂の運営代表、地域ボランティア、そして新潟市の子ども食堂ネットワーク事業事務局の横尾氏の三名の方から発表をしていただきました。発表後の質疑応答では、フロアーから次々と質問をいただき、活発なディスカッションとなりました。

「発表1 そらいろ子ども食堂代表 田村友樹氏」

そらいろ子ども食堂代表（3代目）。ボランティアから運営委員となり、平成29年2月から代表を務める。青陵大学福祉心理学部社会福祉学科子ども発達サポートコース3年生。保育士、社会福祉士を目指して勉学に励みながら、アルビレックス新潟の熱狂的なサポーターとして全国を駆け回る。

<p>立ち上げの経緯</p> <p>地域の課題 ・子どもの貧困 ・地域の繋がりの希薄化 ・「こしよく」など</p> <p>アイデア ↓ 地域への思い ↓ 行動力 ↓ 柔軟性</p> <p>ナナメの関係 ↓ 学生を活かして ↓ この地域をよりよくしていきたい！</p>	<p>学生主体の意義とは？</p> <p>子ども 学生 大人</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもと大人の間にいる学生は どちらの気持ちにも寄り添える 親や先生（タチ）でも友達（ニヨコ）でもない 「ナナメの関係」を生かした話しやすさ、 居心地の良さが生まれる 学生が活動することで他の多くの学生に 「子ども食堂」を広めることができる 	<p>当日のタイムテーブル</p> <p>13:30～ 運営委員集合、ミーティング、 開催に向けての準備</p> <p>14:00～ ボランティア受付、 寄付受付</p> <p>17:00～ そらいろ子ども食堂オープン いただきます！</p> <p>18:00～ 運動、製作などのあそび （季節ごと、開催ごとに企画）</p> <p>20:00 開催終了、掃除片付け</p>																								
	<p>●参加人数</p> <p>□ これまでの開催回数 30回</p> <p>□ 全参加人数 1,970人 ※運営委員を除く</p> <p>□ 1回の開催における平均人数 約66人/回</p> <p>表 直近3回の開催の参加人数内訳</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>未就学児</th> <th>子ども</th> <th>大人</th> <th>学生ボランティア</th> <th>計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>9月1日</td> <td>12</td> <td>14</td> <td>28</td> <td>5</td> <td>59</td> </tr> <tr> <td>10月6日</td> <td>14</td> <td>23</td> <td>28</td> <td>15</td> <td>80</td> </tr> <tr> <td>11月4日</td> <td>10</td> <td>27</td> <td>24</td> <td>14</td> <td>75</td> </tr> </tbody> </table>		未就学児	子ども	大人	学生ボランティア	計	9月1日	12	14	28	5	59	10月6日	14	23	28	15	80	11月4日	10	27	24	14	75	<p>●ボランティアの参加人数</p> <p>1年間（計14回開催）で・・・延べ138名!!! （大学生115名、高校生12名、地域ボラ11名） 1回平均・・・9.8人</p> <p>複数回参加した人数・・・23名</p>
	未就学児	子ども	大人	学生ボランティア	計																					
9月1日	12	14	28	5	59																					
10月6日	14	23	28	15	80																					
11月4日	10	27	24	14	75																					

田村氏からは、学生がそらいろ子ども食堂を立ち上げた経緯、学生主体の意義、参加実績などを発表していただきました。

また、そらいろ子ども食堂の運営が持続可能な活動になっている要素として、「学生が考えて作り上げる」、「やらされている感がない」、「学生主体で活動に参加できる環境が整っている」ことを主張されていました。

「発表2 そらいろ子ども食堂地域ボランティア 佐藤文絵氏」

そらいろ子ども食堂は、食事の調理も学生が行っています。様々なボランティア経験をお持ちの佐藤さんは、そらいろ子ども食堂の「地域ボランティア」として、調理に関わってくださっています。おもいがけない食材の提供や、土付きの根菜は学生は同料理してよいかかわからず。こんなときには、佐藤さんたち地域の方の出番。また、レシピどおりに仕上がらず泣きそうな学生に、救いの手を差し伸べてくださいます

発表の要旨は以下のとおりです。

そらいろ子ども食堂は、主婦、元寿司職人、中華なべを自在に操る男性など、多彩な方が調理ボランティアとして学生をサポートしています。

また、そらいろ子ども食堂の地域ボランティアの良さは、時間が決まっていないこと。都合によって、今日は3時間、今日は1時間だけと参加できます。また、調理ボランティアだから調理だけで終わりではなく、子どもたちの食卓に入らせてくれるので、参加した親子と当日のおかずの作り方などの話をしながら、子ども食堂に参加もできます。

学生は、授業で習ったとおりに行うので、衛生面もアレルギー対応もとてもいいです。また、調理スタッフの学生や調理ボランティアの誰か一人に過重がかからないように、全体を目配りしながら食事を作り上げている。何よりも、子どもたちにおいしいお料理を提供したいという強い「思い」がある。まさに、「そのひと手間が I love you」。手間と愛情をかけて子どもたちのために食事を作ろうという姿勢は素晴らしいと感じます。

「発表3 新潟市子ども食堂ネットワーク事業事務局 横尾三代子氏」

新潟市社会福祉協議会地域福祉課子ども家庭推進事業係長。新潟市内の子ども食堂の横のつながり、情報の共有を図る「新潟市子ども食堂ネットワーク事業」事務局を務めてくださっています。実は、ご自身も新潟市内初の子ども食堂「ふじみ子ども食堂」の発起人のお一人。公私に渡り、子ども家庭の福祉に尽力されています。

横尾氏からは、「新潟市子ども食堂ネットワーク事務局としての役割と課題」をテーマに発表していただきました。現在、新潟県内には57の子ども食堂があり、他県同様急速に増加しています。新潟市社会福祉協議会の総合計画には、こども・子育て支援の基盤づくりとして「子ども食堂の推進」が明記されており、ネットワーク事務局としての役割は①情報交換会の実施②立ち上げ支援③運営継続支援④普及啓発の4点です。立ち上げ支援では「子ども食堂をつくろう！！」の冊子を2000部作成、運営継続支援としては寄付物品の窓口となり、必要なところに、必要な資源が届くようコーディネートしています。

今後の課題は、こどもを地域で育むための関係機関との連携と企業との連携であることを発表していただきました。

3人の方の発表後、フロアーと活発な質疑応答、ディスカッションが繰り広げられました。いくつか御紹介します。

Q1：「新潟では行政の支援は？市社協の工夫と限界は？」

A1：新潟市は貧困対策計画を立案し、新潟県は居場所づくり事業を作っている。

新潟市社協が行っている「子ども食堂ネットワーク事業」は予算はゼロ。でも予算がないからできないわけではない。いくらでもお金がかからない工夫はできる。限界はあまり感じたことはない。地域の方が、この活動をどれだけ大事だと感じてくれるかが大切であるという力強い回答をいただきました。

Q2：「学生の強み、ナナメの関係ということばに関心を持った。自分は地域スポーツコーチをしているが、子どものけんかにでくわすと、学生ごときが介入してよいのかとか思っててしまう。子ども食堂ではけんかに対して、どのように学生が対応していますか」

A2：子どもは上から言われると嫌。学生スタッフは注意はするが、子どもの気持ちに寄り添うことが大事だと考えている。地域ボラの立場では、叱ったこともある。学生は困りながらも対応し、授業で習ったことが生きた！と実感する場面もみかける。多世代からの、それぞれの立場での関わりがあることが、子ども食堂の魅力である。

Q3：「関係者とのコミュニケーションや理解をしてもらう工夫は？」

A3：地域には子ども食堂開設に、反対する方もいた。民生委員を巻き込む、プレオープンをして地域の方にご理解いただく、行政の窓口に招待状を送るなどの工夫は有効。

最後にコーディネーターから発表者の皆さんへの問いです。

「そらいろ子ども食堂の活動を通して、学生たちはどこが成長していくのか。どんな経験が成長を促すのでしょうか。」

田村氏：子どもの貧困や“こしょく”に関心をもつようになった。この活動をやっていなければ深く考えることもなかった。自分たちの活動を通して、そのことを広められるようになった。自分自身でいえば、発表する力、仲間をまとめる力、人材の適材適所の配置ができるようになったことである。

佐藤氏：何よりも隣にいる田村氏。2年前の最初の出会いでは孫と遊んでくれた。優しい子だなと思ったが、それが、こんなに成長した。

横尾氏：学生から「財源確保」、「人材確保」という言葉ができることが大きな成長の証。

各シンポジストからの実践に基づく発表やフロアーとのディスカッションを通して、まさに大会スローガンである「あなたが動けば世界は変わる。多世代で彩るボランティア学習。」を実感した分科会であった。 (以上)